

駅からはいつもダッシュ!

「取引先直行」一翌日のスケジュールを記入することになっているホワイトボードに書き込みながら、大きなため息がひとつ。「こんな生活が、いつまで続くんだろう……」

食品メーカーで営業を担当する浅井さんには、2歳になる娘がいます。フルタイムで働く妻と共働きで子育てをする毎日、目がまわるほどの忙しさ。特に浅井さんを悩ませているのは、夫婦交代でしている保育園への送迎です。保育園に娘を送り届けてから出社すると、職場への到着はどうしても始業時間ぎりぎりになり、まだ保育園に通い慣れない娘が途中でぐずり出したりすれば、遅刻してしまいます。常に時計の針に目をやりながら、娘を急ぎ立てるようにして先を急ぎます。帰りは帰りで、保育園が閉園する午後7時に間に合うように迎えに行かなければならないため、駅から保育園までの道はいつもダッシュしているのだそうです。

「本当は良くないことなのですが……」

と、言いにくそうにしながら、彼はさらにこんな話をしてくれました。「実は、取引先とのアポイントメントが朝や夕方にくるように調整して、送迎の時間をやりくりすることもあるんです。朝10時にアポイントメントを入れて取引先に「直行」すれば、遅刻の心配をせずに保育園に娘を送ることができます。同じように、夕方17時にアポイントメントを入れて「直帰」にして、迎えの時間に間に合わせるようにしている、と言うのです。

制度は女性が利用するもの?

「本当は、こんなことはしたくないんです」。浅井さんは、保育園の送り迎えの都合でアポイントメントの時間を調整するこ



とに後ろめたさを感じていました。明日はどうやって間に合わせよう、と頭を悩ませる日々に、「こんな生活がいつまで続くんだろう、いつまで続けられるだろう」と、不安に駆られることもあると言います。しかし、そんな現状を、誰にも相談できずにい

るのです。

浅井さんの職場でも、フレックスタイムや短時間勤務の制度など、従業員のワーク・ライフ・バランスや子育て支援のための制度は充実しつつあるようです。しかし、こういった制度は「子育て中の女性が利用するもの」との認識がまだまだ根強いのが現状。「男の自分が、『子どもの迎えがあるので早く帰ります』などとはとても言い出せない」と、浅井さんは言います。「プライベートの都合を仕事に持ち込むなんてけしからん、と言われるに決まっている」と。

「小さな一歩」で改善も!

しかし、彼の話にもあるように、水面下ではすでに、プライベートの都合を仕事に持ち込まざるをえない状況になってしまっているのです。この状況を放置すれば、彼個人にとってだけでなく、仕事のうえでもマイナスであろうことは、誰の目にも明らかです。この状況を、どうにか改善できないものなのでしょうか?

保育園への送迎の負担を減らすために企業内託児所を設けたり、勤務時間を大幅に短縮したり、といったことは、すぐに実現することは難しいかもしれません。しかし、たとえば、朝の出社時間を30分遅らせることができたとしたら、どうでしょうか。夫婦交代で送迎をする浅井さんの場合、1日あたりの勤務時間はそのままに、始業・終業時間を前後に「ずらす」ことができるようになるだけでも、かなり時間のやりくりがしやすくなるはずです。精神的にも肉体的にもゆとりを持って保育園への送迎ができ、より集中して仕事に取り組めるようになれば、企業側にとってもプラスになります。

浅井さんのように、誰にも相談できずに独り抱え込んでいる共働きパパの悩みのなかには、このような「小さな一歩」によって改善できることも、実は少なくないのでは、と感じています。(わしお・あづさ)

※この連載は、ヒューマンリソース研究所の中間真一主席研究員と鷺尾梓研究員が交互に執筆します

プライベートの都合を 仕事に持ち込むなんてケシカラン?



「男たちのワーク・ライフ・バランス」

ヒューマンリソース研究所編著
幻冬舎リソース刊2008



鷺尾 梓 株式会社ヒューマンリソース研究所 研究員

国際基督教大学大学院教育学研究科修士課程修了。2004年より現職。国内外における生活価値観調査をもとに、「働く」「学ぶ」「暮らす」といった生活の基本から、未来に向けたライフスタイル・社会のあり方を探求している。共著書に『男たちのワーク・ライフ・バランス』(幻冬舎リソース)。